

理事長就任の辞

理事長 崎 田 隆 夫

本年5月、広島で行なわれた理事会で、20年余り御仕事を続けられた初代理事長田坂先生が理事長辞任を表明され、不肖私が数ある有能な諸先生のなかで、その跡つぎに任せられましたことは、まことに身にあまる光栄であり、唯々その責務を果しうるかと思われうるものであります。ここに会員の皆様に大きな御指導と御支援を衷心御願ひ致すと共に、かくかくたる御業績をうちたてられた田坂先生の御功績を些かなりともけがすことなく、更にそれを前進させるという難事に体当りで、ぶつかってゆこうと、心中秘かに誓うものであります。

そして、僭越ではあります、田坂先生の長年にわたる御努力御苦労に対し、会員一同を代表し、深甚の謝意を捧げたいと思います。

十年一昔と申しますが、ふりかえって考えますと、20数年という歳月は長い日日でありました。然し、反面、昨日のように、当初の頃のことを思い出すのであります。

この学会の揺籃は、昭和28年5月東大分院で行なわれた第1回胃カメラ研究会であります。当時の記録をくってみますと、演題数4題、集るもの20～30人であります。胃カメラなどで学位がとれるものか、という雰囲気の中で始めた誠にささやかな発会でありました。そしてそのときから起算すると、すでに30年近くの年月が流れております。本年80歳を迎えられた田坂先生が当時52歳、昨年やっと還暦をこえた芦沢教授と私が31歳であったこととなります。当時誰が現在の盛況を予想し得たでありませうか。唯々感慨無量の一語につきると思います。

この研究会は回を重ねるに従い急速に発展し、昭和33年11月第6回日大有賀教授会長の下に行なわれた研究会では、会員が日大講堂にあふれ、会は熱気にあふれました。何百年の間、世界の医学界が果し得なかつた夢ともいふべき、胃癌早期診断が胃カメラにより達し得られるのではないかというこれこそまさに夢の実現がそこはかとなく会員の胸に宿り始めたことが、この熱気の原因ではなかつたかと思われるのであります。そしてここで研究会は学会へと発展致しました。

昭和34年6月第1回胃カメラ学会は田坂先生会長のもとに、東大医学部大講堂でまさにはなばなく開会されました。演題数は44題であり、参会者は、大講堂にあふれました。

終って好仁会で開かれた評議員会の活気に満ちた模様も、昨日のように思い出されます。

故山川順大教授の、「胃カメラの産みの親、林田教授、育ての親、田坂教授の御努力に深甚の敬意と祝意を捧げる……」という御演説に、満場の強い拍手がわいたことも、本当に懐しく思い出されます。

学会は年一年と隆盛の一途をたどり、昭和37年4月、第4回学会を期に、胃鏡を包含し、更に内視鏡全般を含めて、日本内視鏡学会と改名し、数ヶ月後には社団法人が認可され、ここに初代田坂理事長が誕生したのであります。ここで忘れてはならないことは、胃カメラと胃鏡の研究会が分派しなかつたことであります。このことは、本学会がその後世界をリードするにまでも発展した原因の大きな1つとさえ言えることであると思います。ここに両巨頭、田坂、近藤の両先生に、会員一同深甚の謝意と敬意を表しななければならないと思います。

そして、その後この会が消化器内視鏡学会と改名されるまで、本会は「エンドスコーピー」と広く愛

唱されるに至りました。そして、ここで、本会に世界的に不動の地位を与える基をつくる早期胃癌全国集計が田坂会長、村上委員長のもとで行なわれたのであります。そして、これの大成功は余勢をかつて、世界内視鏡学会を第1回会長田坂先生の下で開催するという決定を、昭和37年6月ミュンヘンで行なわれた第2回世界消化器病学会で、諸外国代表満場一致で獲得したのであります。私は田坂先生の代理として出席し、この提案をするという栄えを与えられました。これは、その直前成功した早期胃癌全国集計による早期胃癌診断基準の確立がその成功の大きな原因であったことは言うまでもありません。

紙数がつきましたので、又近い将来、この続編的なものを書かしていただきたいと思いますが、何と言っても、世界人類を胃癌から完全に救おうとい根本理念が本学会での中心として躍動しつづけたことが、本学会をここまで発展させ、尚今後も発展をつづけるであろうことの最も大きな柱の一つであると言ってよいのではないのでしょうか。そしてそのためには、この検査を苦痛の皆無な簡単なものとし、広くあまねく、集団的に健診的に行うことが、必須のことであることは、言うまでもないことかと思えます。幸いにして本会はその道を曲りなりに歩いてきました。

このことのために、田坂先生が会長となられ、昭和29年夏頃より始めたオリンパス光学技術陣と、東大第1内科を始めとする endoscopist との検討会が、必ず毎月1回行なわれ、記録を読みかえしてみても、よくもこれほど熱心にやり続けたものだと思われるまことに真摯といってよい熱心な検討会が行なわれ、昭和52年10月には第122回に達し、その後も行なわれていることを記しておきたいと思えます。この会も歴史に残る不滅の功績を持って居ります。その他、これを広く普及するための研修会、学会の支部結成のため、田坂先生のおともをして、全国をかけ歩いたこと等思い出は無数にあります。学会の今後はいかにあるべきか、これも真剣に考えなくてはなりません。

常岡委員長のもと、先般発足した専門医制度も、学会にとって懸案となっていた重要な業事であります。明年6月ストックホルムで行なわれる世界内視鏡学会で榮譽あるシンドラー記念講演を第1回田坂先生御講演に続き、日本人として第2回目の演者に不肖私が任命される榮譽を与えられ、会員の皆様の業績を発表することになっております。

昭和54年日本医学会総会分科会にやっと加入致しました。遅きに失したという声も大きいのですが、ともあれまことに喜ばしいことと思えます。

このように、あれやこれやと反省回顧すべきことを近い将来、また書かせていただくこととし、ここでは、理事長就任の御挨拶と、皆様の御指導、御支援の御願いを申し上げさせていただきました。

昭和56年12月 暮